

日本語学習におけるオンデマンド型授業についての分析

－日本語専攻でない学習者を対象として－

Analysis of On-demand Classes in Japanese Language Learning - For Non-Japanese Language Major Learners-

汪 宇凡, 野崎 浩成

Wang Yufan, Nozaki Hironari

愛知教育大学教育学研究科

The Graduate School of Education, Aichi University of Education

Email: uuhan47@gmail.com

あらまし：本研究は、中国の日本語非専攻学習者を主な対象とし、アンケート調査を通して学習者は日本語学習におけるオンデマンド型授業の利用状況や意識を明らかにする。今回の「オンデマンド型授業」は、学習者が持つ動機によって自発的に学習を行うために利用されている授業である。新しい知識やスキルを習得するためにオンデマンド型授業が主流になりつつあるが、必要なインタラクティブ性が不足しているため、従来の学習方式を完全に成り代わることはできない。また、日本語非専攻者と専攻者の比較から分析を行い、使用傾向やストラテジーの分析結果により、非専攻学習者向けのオンデマンド型授業のデザインを試みた。データから得られた結果は客観的であるが、今後はより規模の大きなサンプルやレベルの研究に進むことが求められる。

キーワード：オンデマンド型授業、日本語学習、日本語非専攻学習者、オーディエンス分析

1. 研究目的

日本語の学習において、日本語専攻の学生よりも、非専攻学習者の方が多くの課題に直面している。このような背景から、オンデマンド型授業は柔軟的な学習方法として日本語非専攻学習者に選択されるようになってきている。しかし、今のところ日本語非専攻学習者によるオンデマンド型授業の利用状況に関する研究はまだ足りない。本研究の目的は、日本語非専攻学習者が日本語学習過程におけるニーズ、学習動機、学習目標、学習リソースとツールに対する期待など深く理解することである。オンデマンド型授業を利用する理由や具体的な偏向を調べることで、学習者がどのような学習方法を好み、どのように個別化すればよいかを明らかにする。オンデマンド型授業を利用している学習者が、言語能力の向上や知識の習得など、実際の学習効果を調査する。

また、学習者がオンデマンド型授業を利用する際に直面する課題や困難を分析し、オンデマンド型授業の設計とサポートの改善を提案する。本研究の結果が、日本語非専攻学習者により良い学習支援やリソースを提供し、活用されることが期待される。

2. 研究の方法

2.1 調査対象

学部で日本語を専攻する学生と日本を専攻しない学生を分析対象とする。日本語専攻 50 名、日本語非専攻 76 名で、中国南京市にある大学生、および、現在日本に留学している学生であった。

2.2 調査方法

調査紙は、「基本情報」「オンデマンド型授業の利用状況」「オンデマンド型授業の利用傾向」「オンデ

マンド型授業への提案」の 4 つの部分で、合計 35 問の質問で構成されている。

3. 結果と考察

3.1 基本状況

オンデマンド型授業の認知度に対しては、中国では明確な基準がないため、一般的にはオンライン授業と呼ばれている。学生や教育者はオンライン授業ほどオンデマンド型授業に熟知度は高くない。

3.2 日本語非専攻学習者の利用傾向

回答者のうち、通常パソコンでオンデマンド型授業を利用している人が 42%で最も多く、21%がタブレット端末、37%がモバイルで利用している。学習者は、パソコンやモバイルを通じて日本語のオンデマンド型授業を利用する傾向が強いことがわかる。

オンデマンド型授業を利用する時間帯は、夜が最も多く(63.2%)、次いで週末(19.7%)で、午前(7.9%)と午後(9.2%)がほぼ同じである。よって、非専攻学習者は週末と夜に日本語を学ぶことを好むことを示している。

3.3 ストラテジー

「日本文化に関心を持っているか」という質問に対し、「1.非常に関心を持っている 2. やや関心を持っている 3. 普通 4. あまり関心を持っていない」という四段階から一つを選択してリッカート尺度を用いた。その結果、平均値は、非専攻者(3)と専攻者(2.8)近いので、日本語への関心度も同じだと考えられる。 t 検定の結果でも、両群間で有意差は見なかった($p>.05$)。

非専攻学習者がオンデマンド型授業を利用して日

本語を学ぶ動機のデータから見ると、自身の語学力向上のためにオンデマンド型授業で日本語を勉強している人が非常に多いことが分かった。

日本語のオンデマンド型授業の選択に影響を与える要素の質問には、「内容の関連性」を選んだ人が全体の67%と最も多く、内容の関連性はオンデマンド型授業の選択に直接影響する最も重要な要素であると推測される。

オンデマンド型授業とライブ配信型授業は、オンライン授業の二つの異なるモードであるが、最大の違いは、オンデマンド型授業は自分のスケジュールに合わせて、いつでもどこでも学べるという時間の柔軟性が高いことである。調査では、ライブ配信型授業よりオンデマンド型授業を好む人が35%で、オンデマンド型授業を好む人は、学習のプロセスをよりよくコントロールし、自分のペースに合わせることができるといえる。しかし、一部の学習者はライブ配信型授業に慣れていて、教師の指導の下で学習しやすく、直接の手本と説明を通じて知識がよりよく理解と習得につながる場合もある。

「今後の日本語オンデマンド型授業で望む新機能やコンテンツ」については、技術向けの新機能を望む学習者が新しい内容を望む学習者の約5.6倍である。これは現在の日本語学習に関するコンテンツが十分に充実しており、技術の機能が学習者のニーズをすべて満たすには程遠いためだと考えられる。

3.4 利用差異

非専攻者のオンデマンド型授業の平均受講時間は33.25分間で、専攻者の平均受講時間は20.4分間となる。これは、非専攻学習者が文法や語彙などの基礎知識が少ないため、日本語の内容を理解し吸収するのに時間がかかるのに対し、専攻者はすでに日本語の基礎がある程度身につけているため、より早く内容を理解し、日本の文化や歴史の紹介に関心が高いからと思われる。

「余暇に日本語を勉強する意欲があるかどうか」については、非専攻者（「はい」82%、「いいえ」9%、「どちらでもいいない」9%）、専攻者（「はい」82%、「いいえ」4%、「どちらでもいいない」14%）、であった。「はい」の割合は同じであるが、「いいえ」は、専攻者の方が少ない、ということが分かった。

表1には、オンデマンド型授業を利用した後、授業内容を理解できるかどうか。非専攻者と専攻者の意識は基本的に同じであることがわかる。専攻者の中で、「あまり理解できない」と答えた人はゼロであり（表1）、専攻者は日本語の基礎や専門知識を身につけており、複雑な言語構造を理解しやすく、学習内容をより深く理解することができるからであろう。相対的に言えば、非専攻者は日本語についての先行知識が少ないため、学習効果に多少の違いがある。

表1 日本語オンデマンド型授業の理解度

	日本語オンデマンド型授業から学んだことは理解できるか（人数とその割合）	
	非専攻	専攻
完全できる	9 (12%)	3 (6%)
大体できる	63 (83%)	47 (94%)
あまりできない	4 (5%)	0

3.5 学習環境デザイン

調査結果から筆者の考える提言は次の通りである。コンテンツ提供者は学習者の動機に合わせて日本語のオンデマンド型授業を設計することが必要である。ソーシャルメディア上のオンデマンド型授業は、30分の動画の中で知識ポイントごとに短いコンテンツに分割する方が良い。簡潔で理路整然としたホームページは、訪問者が探している情報を見つけやすく、ユーザーの満足度を高め、訪問を継続する可能性を高める。

4. まとめ

今回の分析結果から、学習者のデバイスやプラットフォームの利用の好みが明らかになったことで、今後、異なるプラットフォーム上やデバイスによる互換性も考慮する必要がある。

普段日本語専攻学習者は教師の役割に依存する傾向が強いと認識されているが、本研究では有意な差は反映されなかった。非専攻者も専攻者ともに、オンデマンド型授業に対して肯定的な態度を持っており、時代の技術発展に対応したオンデマンド型授業の改善に対する技術的な期待も高い。これはオンデマンド型授業の改善や発展に実践的な示唆を与えると思う。

5. 今後の展望

サンプル数が少ないため、今回のアンケートには限界が存在している。将来的にはサンプル規模を拡大し、より多くの分野背景を含めた比較研究を行うことも考えられる。今後の研究では、学習経験と効果を向上させるために、オンデマンド型授業における新しい技術の運用に焦点を当てる必要がある。

参考文献

- (1) 井田志乃 (2022) 「オンデマンド型授業におけるアクセスログ分析」『宮崎公立大学人文学部紀要』29(1), p. 19-37.
- (2) 陳明涓 (2015) 「日本語非専攻学習者のピリフ調査：台湾の大学生を対象に」お茶の水女子大学日本言語文化学会『言語文化と日本語教育』50, p. 102-112.
- (3) 彭晶・王婉瑩 (2003) 「Research on Japanese Major Students and Non-major Students, Learning Motivation and Learning Effect」『TSINGHUA JOURNAL OF EDUCATION』24(S1):117-121.